

メルヴィルの「鐘楼」：共和都市国家の法

石井光子

“The Bell-Tower” は、1855年の春に脱稿、*Putnam's Monthly Magazine* の8月号に掲載された短篇小説であるが、メルヴィルの手によるものとは信じ難い作品である。ルネサンス期イタリアを舞台とするゴシック小説、あるいは、異国趣味・懐古趣味に訴える寓話とも読め、ポーやホーソンの作品の如き雰囲気をかもしだしている¹。当時の Putnam 社の編集顧問、George William Curtis は、新社主の J. H. Dix に、一旦、不採用を推めながら、結局、“To many the style will seem painfully artificial and pompously self-conscious. But... well suited to the theme. The story has the touch of genius in it... the style is consistently picturesque.”² と掲載を説得している。一般受けは諦め、書評・玄人の好む趣向に富んだ技巧的作品と見なしたのであろう。「鐘楼」は、Putnam 社が1856年に出版したメルヴィル生存中唯一の短篇集 *The Piazza Tales* にも収録されており、また、メルヴィル再評価以前の文学全集や短篇集にメルヴィルが集録される場合には、この「鐘楼」が選ばれる事が多かった事からも、³ 長年、代表作と見なされていたことは明らかである。1969年版の短篇集の編者 Berthoff が、“the most Hawthonesque... the most inept... arthritically clumsy; the Faustian (or Frankensteinian) parable is both labored and erratic in its progression: and the moralizing last paragraph makes you wish it might be proved that somebody else was the real author.”⁴ と酷評しているのも、Bergmann が1986年に至ってもなお、“dramatic allegory of the kind written by

Nathaniel Hawthorne”⁵ と断言しているのも、メルヴィルらしくない作品が、妙に代表作扱いを受けてきたことへの反動であろう。

まず、いかにメルヴィルらしくない短篇であるかを見てみよう。

南ヨーロッパの平原に、かつてフレスコ画で飾られた都市があり、その近くに、倒れた松の巨木かと思まがう鐘楼がある。この鐘楼は、当代随一と言われた “great mechanician”⁶ Bannadonna が、レバント交易で栄えた共和都市の指名により建造させたものである。市民の誇りとなるべくイタリアーの鐘楼は完成するが、鐘の鑄造に際してつぼの火勢に怯えた職人を、バナダナは打ち殺してしまう。それでも最高の鐘楼を望む市民はバナダナを弁護、裁判官は無罪とし、司祭は赦免する。また、バナダナは、その技術で鐘の傷を塗りこめ、何事もなかったかのように鐘も完成する。バナダナの斬新な設計により、鐘は時計と連動するはずで、市民の誇りは増々高まってゆく。鐘楼の竣工の祝日に向けてバナダナは自動鐘つき男を作成し、その取り着けにかかる。しかし、設計通りに、祝典開始の鐘をついた機械じかけの人形は、鐘の浮彫りの最後の仕上げに時間を忘れたバナダナの頭をたたき割る。バナダナの葬儀に合わせて始めてつくられた鐘は、塔をかしげて落下し、再鑄造される。そして、バナダナの死のちょうど一年後、夜明けの地震で鐘楼は倒壊する。

この短篇のエピグラフは、メルヴィルによるものとされている三文から成る。

“Like negroes, these powers own man

sullenly; mindful of their higher master; while serving, plot revenge.

'The world is apoplectic with high-living of ambition; and apoplexy has its fall.'

'Seeking to conquer a larger liberty, man but extends the empire of necessity.'

From a Private MS. (p. 195)

このエピグラフと、結末の教訓めいた解釈、

So the blind slave obeyed its blinder lord; but, in obedience, slew him. So the creator was killed by the creature. So the bell was too heavy for the tower. So the bell's main weakness was where man's blood had flawed it. And so pride went before the fall. (p. 213)

から、Howard は、「鐘楼」は、“Benito Cereno” と対を成し、片や黒人を、片や機械を意のままにしようとして、その傲慢さゆえに、奴隷となるはずのものに殺される悲劇の主人公を描くものととらえ、“(Melville) left no questions for a reader to ask”⁷ とまとめて、明らかな寓意物語と結論づけている。もちろん、伝記の著者である Howard は、1855年2月から背中リューマチに、続いて6月からは座骨神経痛に悩まされ、義父の援助で買った農場の世話もできず、3月に生まれた4番目の子供をかかえ、家長としての経済的責任を果たせない作家にいたく同情し、主人公バナダナの報われなかった芸術活動に、メルヴィル自身が投影されている、即ち、Pierre や Ahab のような人物像を呈示して人気作家の地位を失ったメルヴィルが、自らの作品に殺されるバナダナを描いて、人の規を起える芸術活動の悲劇性を、一見単純な寓話の裏に織り込んでいると解釈している。⁸ Beaver は、「鐘楼」を、*Ethan Brand* と、⁹ Rogin は“Birthmark”と比較し、完璧を求め、自らの技術や野望に溺れる天才の悲劇と考

え¹⁰、あるいは、Dillingham のように、バナダナが、“the unblest founding” (p. 197) である事に注目し、階級社会に納まり切れない“rebellious extraordinary person”, “highly successful commoner”¹¹ の葛藤を描くとする解釈もある。

しかし、バナダナは、批評家達の言うほど、才能に恵まれながら報いらなかった天才として描かれてはいない。共和都市の市民には天才と賛えられ、名誉を与えられてはいるが、屈強な農夫が反動をつけて引いただけで、かしいでしまう鐘楼には、どう考えても設計上の問題がある。また、地震の多い南欧で、完成後1年にして最初の地震で倒壊する塔など、建築家が参画した建造物とは考えられない。その上、バナダナの“more daring skill” (p. 198) を尽くして鑄造された鐘も、彼の葬儀の日に落下、亀裂を生じるが、その後、何なく再鑄造され、使用された事になっている。彼の技術は必要なかったのである。

バナダナは、むしろ、自らを天才と呼ぶ人々に欺むかれた凡庸な男だったのであろう。ちょうど、「ベニト・セレノ」の Amasa Delano が、平等主義の善人と紹介されながら、その言動は根深い人種差別によって歪んでいるのと同様、メルヴィルは、「鐘楼」においても、悲劇的天才を描くと見せて、無能な職人の姿を紹介しているのである。二重構造の人物像という点において、「鐘楼」は「ベニト・セレノ」と、対を成す作品とも言えよう。

では、歴史的コンテクストの中において、この作品は、どのような短篇小説になるものだろうか。

1855年4月号の *Harper's New Monthly Magazine* に発表された“The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” は、英国中産階級の独身男性の晩饗風景と、ニュー・イングランドの製紙工場の工女の生活を対比させる短篇である。この「鐘楼」脱稿の頃に発表された「乙女達の煉獄」との比較から、合衆国北部の急激な工業化・機械化に対する警鐘を鳴ら

す作品ととらえる解釈も可能であろう¹²。

バナダナが如何にして自動人形の製作を思い至るかを詮索した市民の結論は、生身の鐘つき男の姿からであろうと言うものである。そして、その描写は、鐘つき男の“姿”を、“it”で受けて、あくまで、鐘つき男を“it”で表わし続けている。

Perched on a great mast or spire, the human figure, viewed from below, undergoes such a reduction in *its* apparent size, as to obliterate *its* intelligent features. *It* evinces no personality. Instead of bespeaking volition, *its* gestures rather resemble the automatic ones of the arms of a telegraph.

(p. 208, italics mine)

逆に、自動人形 Haman に言及するバナダナは、“when Haman there, as I merrily call him, —him? *it*, I mean—when Haman is fixed on this, his lofty tree,…” (p. 202, italics in the original) と、自分でもわからないほどに曖昧な扱いをしている。鐘つき男が“it”になり、逆に、技師が精魂こめて創り出した機械は“him”となるのである。そして、ルネサンスの思潮を超えていたバナダナは、机上の空論となりがちな論理学、錬金術師のるつぼ、見神論者の頼る祭壇にも興味をもたず、ただ、“plain vice-bench and hammer” (p. 210) を用いて自然を統御しようとした “[a] practical materialist” (p. 210) であったと描かれ、“[w]ith him, common sense was theurgy; machinery, miracle; Prometheus, the heroic name for machinist; man, the true God” (p. 210) と定義されている。ルネサンス人としては合理主義者、経験主義の権化とも映る紹介のされ方である。しかし、常識を魔法術、機械を奇蹟、プロメテウスを守護聖人とし、人を本来の神と見なすのは、古典物理に神の摂理を見出し、機械を信仰への導びきと捉え、プロメテ

ウスを偶像視し、人の能力に神を見る、即ち、信心の対象が合理主義・機械技術であるという、自己矛盾を具現した人物像である。その上、彼は無能な技師であるから、技術信奉者が、何の裏づけも持たない姿を露呈するという筋立ては、まさに、機械文明に対する批判を表わしたものと見えよう。

また、Karcher は、Haman やバナダナではなく、鐘そのものに注目している。合衆国の独立の精神を象徴するべく鑄造された the Liberty Bell の銘は、万民の平等を宣し、奴隷所有者である政治家を賛える祝典の際に、二度も大きな亀裂を生じ、三度改鑄されている¹³。そして、この鐘は、当時の奴隷制廃止論者が、独立宣言と、合衆国憲法の象徴として頻繁に引用したイメージリーである¹⁴。よって、この「鐘楼」は、奴隷制度を糾弾し、奴隷の叛乱を預言する作品であるとする解釈も有力である¹⁵。もちろん、自動人形ハマンが、抵抗しそうなものに火縄銃で射たれた事は、叛乱を恐れる南部人による黒人奴隷の大量殺害をも思わせるし、また、ハマンが闇夜のうちに運びだされ、海に捨てられた点など、African Colonization Society が推進していた、棄民に近い状態での、自由黒人のリベリア入植運動をも思わせる。あるいは、ボストン市民の反対運動にもかかわらず、南部への送還が決定した、逃亡奴隷の Thomas Sims が、1851年4月13日の、午前3時に、暴動を恐れた州政府によって、南部へ向かう船に乗せられた事をも示唆しているかも知れない¹⁶。

急激な機械化と工業化に、労働者の奴隷化を見、また、南部の所有奴隷制に、独立宣言の精神の崩壊を見ていたのは確かであろう。Fisher も、合衆国の中にある “seeds of its own destruction”¹⁷ を、メルヴィルは、工業化してゆくアメリカに見ていたと論じている。しかし、物語を仔細に追ってみると、メルヴィルが、それ以上の破滅の種を見ていたことがわかるであろう。

まず、この短篇の冒頭の2段落は、現在時制

で語られる。遠方から舞台となる過去の都市へと近づいてゆく目があり、ちょうど、ロング・ショットから接近してゆく撮映用カメラのように動いて、この物語が、現在の目のパースペクティブで見られることを要求する。このカメラが、映し出すものは、太古の昔に巨神達と共に倒れ、かびと黒い苔に蝕ばまれた松の巨木と見える物体である。その幹は、落日の中の最後の己れの影を追って倒れ、陽光によって影が移ろうこともなく、こうして地上にひれふして、初めて本来の大きさを露わにして、地衣類におおわれた残骸をさらしている。この巨木が、倒れて後、刻々と変わる影を落とすものではなく、本来の規模を現わしたとされるのは、この作品においては、太陽の属性が“the fleet falsities” (p. 197) と、規定されるからである。天動説の時代ですら、月と対立する不変性の象徴であり、地動説の時代となってからは、恒星としての不変性を科学的に保証された太陽が、目まぐるしい程に、事物の異なった形象を次々と見せる、目くらましのように言及されるのである。むろん、当代随一の鐘楼と、栄華を極めた共和都市の崩壊を描いた短篇であるから、形あるものは全て滅びるという教訓を補強するための舞台装置とも言える導入の妙とも考えられよう。しかしながら、メルヴィルは、「鐘楼」を短篇集に集録する際に、“Piazza”という表題作を書きおろしており、その表題作において、プラトンの洞窟の喩話を展開させている。「ピアザ」の話者は、陽光に輝く山小屋に憧れ、その住人の閉塞した生活に幻想を破られる。影だけしか見えないと言う、その娘との会話から話者は、事物と影の関係を自問し、事物の本来の姿を照らしだすはずの太陽は、時に輝やかしい幻想を与えるだけで、影の形を刻々と変え、真実の姿を見せることのない劇場の照明装置のようなものであると結論づける¹⁸。不変であるはずの太陽も、人の世に及べば、移ろい易い現象のみを見せつけて、人の目を欺むくばかりである。本質的に不変で、時を超え、真理を照らしだすはずの太陽は、また、その本質ゆえに、絶対的なもの

のとして利用される。「鐘楼」の後半において、祝典を待ち、歌やゲームにも飽きた共和都市市民の姿が言及されるが、その頭上には、“the great blurred sun rolled, like a football, against the plain” (p. 205) と、大きくぼやけた太陽が、あちこちへと蹴られ、利用されるお人好しの喩えどうりの言いまわしで、時の経過を示すのである。メルヴィルは、太陽すら便宜的な、利用し得るものとなっている世界を描こうとしているのである。

第3段落では、小鳥を銀の鐘に喩えたかのような過去完了時制の文章が仮定法のコンテキストで続き、“[a] stone pine; a metallic aviary in its crown” (p. 197) と、金属製の禽舎を備えた南欧特有の松が描かれる。この直後に、この松が、実は、大鐘楼であった事が、始めて明らかにされるのであるが、ここでも、メルヴィルは、石、木、金属、そして、空気を思わせる aviary という語を、たて続けに並べて、中世の宇宙を構成した四元素に言及し、この鐘楼が、“the great mechanician, the unblest foundling, Bannadonna” (p. 197), 即ち、教会の祝福も受けない捨て児——ひょっとすると、“白い黒人”かも知れない——であった、建築家でも、芸術家でもない、からくり屋の見果てぬ夢程度の、尋常なものではない事を示唆している。

第4段落から、この三人称話者は、過去時制を用いて、過去の共和都市の出来事を、カメラ・レンズを通して語ってゆく。中世の呪縛から解放されたルネサンス、異教徒との交易に富む共和都市の希求したものは、第二のバベルの塔であって、ノアの子孫の傲慢を繰り返すものであった。と、設定はあくまでも懐古趣味であるが、旧世界からの脱出に出エジプト記を見、新世界にカナンの地を見、合衆国独立に、ルネサンス共和都市国家の姿を見た独立十三州、そして、アフリカ、西インド諸島、中国との交易に富んだボストンやニューヨークを見たアメリカ合衆国のメタファーは、かつてのフィレンツェやヴェネツィアであった。そして、それだけに、共

和制の崩壊も恐れられていたのである。バナダナが、塔の視察に来た行政官達を、“excellenza”, “you liege”, “illustrious magnificoes” (pp. 201-204) と呼び、自らを “vassal” (p. 202) と称する点にも、liege-vassal という中世の残滓、あるいは、master-slave の変形が見え、magnificoes には、僭主 il magnifico、即ち、ロレンツォ・ディ・メジチの姿が見え、共和制の崩壊を危惧するメルヴィルの不安が見えるであろう。

未だ、僭主の現われていないらしい共和都市は、投票により、新しいバベルの建造を決定する。創世紀11章3節には、“彼らは互に言った、‘さあ、れんがを造ってよく焼こう’” とあるが、“the state in which [Bannadonna] lived voted to have the noblest Bell-Tower in Italy” (p. 197) と、民意の要求する塔は、またも傲慢の印である。終に完成した塔の上に立つバナダナに対して市民は拍手を送るが、その喝采は、軽技師に対するものである。“That which stirred them so was, seeing with what serenity the builder stood three hundred feet in air, upon an unrailed perch” (p. 198) と、話者は、はっきりと、バナダナが、中空につかまる物もないのに落ちていた事に対する驚きが喝采の原因であり、決して、塔の設計者に対する賞賛ではなく、サーカスの観客の反応であった事を強調している。作品中、この共和制都市国家が “republic” と呼ばれるのは、唯2度、祝日を定めて、鐘と時計の設置を “amid shows and pomps superior to the former” (p. 99) という状態で行なう際、そして、バナダナの才能と悲運を惜しむ国葬を宣言する時だけである。“republic” という話は、儀式を行なう、それも、サーカスに近い見世物のような行事をつかさどる時のみ言及される語になっている。と言うのも、バナダナの斬新な鐘楼の完成を知らせる午後1時の鐘を、市民は手に手に時計を持って待っていたのである。“The hour hands of a thousand watches now verged within a hair’s breath

of the figure 1” (p. 206) とあるように、鐘楼は、もはや、共同体の生活の中心として、時をつかさどる唯一の大時計の役割をになうことのない飾り物でしかなくなっており、バナダナの仕事も、本質的な意味合いを持つものではなかったからである。

では、この巨大な無用の長物、単なる飾り物の鐘楼を欲した、サーカス共和都市の実態は何だったのか。行政官の中でも、“less elated” (p. 198) であった数人が、増々規模の大きくなる鐘の铸造計画に対して、“limit should be set to the dependent weight of its swaying masses (p. 198) と警告するが、聞き入れられない。このような中庸を求める精神は認められず、貴族達は、“public spirit” (p. 199) から、金銀食器を寄付し、錫や銅とともに溶かしこまれて、鐘は、増々比類無いものとなってゆく。しかし、上記の引用には、メルヴィルらしい地口が窺われている。“揺れる塊の重みのかかり様には限度があってしかるべきだ” と読むのが妥当だが、“右へ左へと一定しない大衆の状況次第の勢力の動きには制限がつけられてしかるべきだ” とも読めるであろう。それでこそ、pendent という、まさに鐘らしい語ではなく、dependent という形容詞が選ばれている理由も明らかになるわけである。また、錫や銅という卑金属に、金や銀という貴金属までが溶けこんで “swaying masses” を形成する、即ち、大衆に、知識人・有力者までが、同調して、塔の強さなど口にしても無視されるような状況に至ってしまっている。また、鐘の仕上がりをせきたてる行政長官は、“The people, too — why, they are shouting now. Say the exact hour when you will be ready” (p. 202) と、民衆の焦立ちを恐れているし、鳴らぬ鐘に待ちくたびれた市民が集まる広場で、この長官は、“station(ed) guards to defend [the tower-door] from the now surging mob” (p. 206) と、暴動に備えている。共和国の市民は、揺れ動いて巨大な塔を倒す “mass” であり、潜在的暴徒なのである。

1850年頃の合衆国は、広大な準州の支配権に揺れていた。1847年、1年後に民主党からの大統領候補者となった Lewis Cass が “popular sovereignty” なる概念を提示し、一応は、準州における奴隷制度の導入は、居住者の自由裁量にまかすこととなった。しかし、中西部の平原に鉄道を敷設するためには、未編成地域の境界を決める必要があった。編成され、準州となれば、“popular sovereignty” 概念に従い、Kansas 及び Nebraska は、居住者の意志により、奴隷制度を導入できる地域となる。これは1821年以後、36°30′以北には、奴隷制度を新たに導入しないというミズーリの妥協を事実上無効にすることであった。カンザス及びネブラスカは、気候と土壌が奴隷制度と相入れない土地であり、事実上、奴隷州の拡大には結びつかないが、法的には、奴隷州の拡張を意味し、北部の恐怖心をあおる結果となり、各政党内の分裂・反目を引き起こし、終に、Whig は空中分解してしまった。その中から、Nativists なる政党が生まれ、マサチューセッツの1854年の選挙に圧勝し、ほとんどの公職を占めるに至った。この Nativists は、ロッジをめぐらせる秘密結社で、外国生まれの人間とカトリック教徒の被選挙権を無効にしようとする政党で、56年には勢力を失ってしまうが²⁰、1855年にマサチューセッツで「鐘楼」を書いていたメルヴィルにとってみれば、激増するアイルランド系移民への差別を根づかせる危険な動きと見えたことであろう。また、同じ頃、カンザスでは、自営農民派と、奴隷制度擁護派が抗争を展開し、“bleeding Kansas” という語が生まれるほど激しい暴動が続いていた²¹。民衆の主権と“揺れる大衆”の決定に従う民主政治の実態、共和国の実状は、政治的混乱と、暴動の連続としか見えなかった時期である。

合衆国と同様 republic であったこのイタリアの都市は、その市民の傲慢から、バベルの塔を再現しようとして失敗した、そして、メルヴィルは、その崩壊の原因として、“So the bell was too heavy for the tower. So the bell's

main weakness was where man's blood had flawed it” (p. 213) と教訓を付している。この “man's blood” は、何をさすのであろうか。寓意物語としての解答は、もちろん、バナダナに打ち殺された職人の血を指すのである。しかし、それ以上の意味をもつのは、彼が免罪された事であろう。イタリアの鐘楼を望んだ共和都市は、職人ひとりの殺害を看過することにし、その上、“charitable” (p. 199) な市民は、美的情熱の発露であると言い、“[a] kick from an Arabian charger; not sign of vice, but blood” (p. 199) とまで言ってバナダナの行為を正当化した。悪ではなく“血”の中にある、即ち、自然に即した行為であると言い切ったわけである。そして、十戒のうちでも特に重大な罪を犯した者を “charity” ゆえに許すという、最も偽善的な慈悲の対象とするのである。そして、この歪んだ世論をも慮らねばならない共和都市は、バナダナに無罪判決と、教会の赦免を与えたのである。自然も正義も道徳も、殺人を正当化するためだけに用いられ “what more could even a sickly conscience have desired” (p. 199) という効果をあげたわけである。

この殺害の場面で、バナダナは “[f] earless as Shadrack” (p. 199) と火勢の中を駆けているが、この Shadrack とは、ダニエル書の英雄である。彼は、ネブカトネザルに捕えられ、血統と美しさと知力ゆえに、国王の近侍となるべく育てられている。が、王の建てた金の像を崇拜しないと讒言され、他のイスラエルの捕虜とともに、るつぽに投げ入れられる。しかし、自分の神は、炉の中の者をも救うと宣言したとうり、炉の中を無傷で歩きまわり、驚いた王により、身の保護と昇進と定住の地を約束されるのである。神明裁判の原型であって、王の法、自然科学の法則以上の法、つまり、神の法がある事を示す旧約聖書からの引用がなされている。しかし、メルヴィルは、バナダナも鐘楼も共和都市も滅亡したものとしているのであるから、バナダナと共に、共和都市の法も、共和都市の教会も神明裁判では、赦されはしなかった

ものと描いているのである。

では、この喩えは、何のためのものであろうか。聖書のシャドロックを守った神の法は、人智では捉えられないものとされている。しかしながら、1850年代の合衆国は、神の法と、同概念とも言える“higher law”の解釈が大問題となっていたのである。北部にとって、“the Compromise of 1850”は、逃亡奴隸法を含む唾棄すべき悪法であったが、有力政治家が議会で展開する“higher law”議論に押し切られ妥協は成立する。当時のニューヨークやマサチューセッツでは、この“higher law”の解釈の仕方では議席数や雑誌の売り上げが激変する状況であった。つまり、Seward は、合衆国憲法よりも高次の法が存在すると論じて“妥協”を成立させたが、片や、Horace Mann は、逃亡奴隸法を指して、“this doctrine—which is one of the off-shoots of slavery—that there is no higher law than the law of the state is palpable and practical atheism”と論じ、“妥協”を認めないはずの higher law に言及している。つまり、相方が higher law を論拠にして、正反対の議論を展開していたのである。そしてまた、憲法も、私有財産を認めることによって奴隸制度を容認したり、万民の自由と平等を保証することによって奴隸制度を認めなかったりすることになっていたし、連邦法が州法と相入れない場合は、自らが憲法や higher law に照らして判断するという議論がなされたりして、收拾がつかなかったのである。このような状況の中でメルヴィルが住んでいたマサチューセッツでは、連邦法に従って逃亡奴隸を引き渡すことは、奴隸制度に加担する最も不名誉な行為と考えられ、有力市民により Boston Committee of Vigilance なる自警団が組織され、逃亡奴隸を自由黒人に見誤っては、カナダへ逃がしたり、引き渡し裁判への抗議行動を行っていた。メルヴィルが、初期の作品を書く際に、参考にし、借用までしたとされる、*Two Years before the Mast* の著者、Richard Henry Dana は、この自警団の参事であり、逃亡を手

伝ったかどで起訴された人物のために、憲法に反する悪法があれば、その法を犯し、憲法論議をひきおこして、憲法を守るべきであると、法廷で証言している。そして、この同じ頃、Shadrack という名の逃亡奴隸が、世論の後ろ盾を得て、何の拘束も受けず、裁判所から歩き去り、カナダへ向かうという快挙が行なわれたのである。メルヴィルにとって、王の法によって焼かれずに、炉の中で歩いていたシャドロックとは、この逃亡奴隸のことであつたらう。しかしながら、このシャドロック事件の3年後、「鐘楼」の書かれる1年前の1854年には、Dana が中心となって Anthony Burns の送環に対する抗議集会が行なわれていた時に、裁判所に押しかけた民衆により、係官が一名射殺され、結局、海兵隊と砲兵隊が動員されるに至って Burns は南部へと送環されている。この送環に対する抗議集会は、急進的奴隸制廃止論者 William Garrison が、リーダーシップを取れるほどに激しいものとなり、アーメンが唱和される中で、逃亡奴隸法とともに合衆国憲法が燃やされたのである。この後、マサチューセッツでは、Personal Liberty Law を通過させ、州法により、逃亡奴隸法という連邦法に従わずともよいという権利を確立している²²。higher law という概念がもたらしたものは、対立し、矛盾し合う州法と連邦法と憲法の存在であり、解釈しだいで何とでも変えてしまえる法、権威をなくして、便宜的に利用される法、そして、そのような法しかもてなくなった共和国である。しかし、このような法を法と呼ぶことができるのであろうか、また、このような法をかかえこんだ国を共和国と呼びうるのであろうか。「鐘楼」の冒頭で紹介される、不変性を表わさず、刻々と影の形を変えてゆき、フット・ボールのように蹴られて利用される太陽とは、この higher law を指すのである。太陽も、higher law も、それ自体は、人智を起えた絶対的なものを象徴するが、地上においては、真実を照らしださず、影だけを映し続ける捉え得ないものなのである。こうして、法を失った合

衆国は、神明裁判を望むかのように、分裂し、南北戦争へと向かっていくのである。

NOTES

1. Mary-Madeleine Gina Riddle, *Herman Melville's Piazza Tales: A Prophetic Vision* (Goteborg, Sweden: Acta Universitatis Gothoburgensis, 1985), pp. 218-219. Riddle は Poe, Hawthorne との類似性を指摘する批評家の名を5名ずつあげている。
2. Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Berkeley: University of California Press, 1951), p. 222. italics in the original.
3. Riddle, p. 143.
4. Warner Berthoff, "Editor's Note" to "The Bell-Tower" in *Great Short Works of Herman Melville*, ed. Warner Berthoff (New York: Harper & Row, 1969), p. 223.
5. Johannes D. Bergmann, "Melville's Tales" in *A Companion to Melville Studies*, ed. John Bryant (New York: Green Press, 1986), p. 263.
6. Herman Melville, "The Bell-Tower" in *Herman Melville: Billy Budd, Sailor & Other Stories*, ed. Harold Beaver (Harmondsworth: Penguin, 1983), p. 197. Subsequent references are to the same edition and the page numbers will be cited in parentheses.
7. Howard, p. 223.
8. Howard, pp. 223-224.
9. Harold Beaver, "Introduction" to *Herman Melville: Billy Budd, Sailor & Other Stories*, ed. Harold Beaver, p. 27.
10. Michael Paul Rogin, *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville* (New York: Alfred A. Knopf, 1983), p. 207.
11. William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction: 1853-1856* Athens: The University of Georgia Press, 1977), pp. 209 & 211.
12. Lea Bertani Vozar Newman: *A Reader's Guide to the Short Stories of Herman Melville* (Boston: G. K. Hall, 1986), pp. 88-89. Newman は, Franklin, Fisher, Rogin, その他の名をあげ機械文明批判ととらえる解釈を要約している。
13. Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980), pp. 156-157.
14. Riddle, p. 152.
15. Karcher, p. 148.
16. Louis Filler, *The Crusade against Slavery: 1830-1860* (New York: Harper & Row, 1960), pp. 204 & 214.
17. Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850s* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977), p. 98.
18. 「ピアザ」のこの解釈については、拙論「メルヴィルの「ピアザ」: 1850年代のアメリカ合衆国」(神戸英米論叢, 1988), pp. 167-182. を参照されたい。
19. Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (London: Oxford University Press, 1964), p. 248. 注において、マルクスは、1807年から Eli Telly が木の時計を量産し始め、1852年には年間10,000から12,000個の時計を生産していた事を述べ、ニューイングランドの時間感覚に変革をもたらしたとしている。
20. *A People & A Nation*, vol. 1, eds. Norton, Katzman, Escott, Chudacoff, Paterson, Tuttle (Boston: Houghton Mifflin, 1982), pp. 214 & 343-348.
21. *ibid.*, p. 354.
22. Filler, pp. 200-217.

(1988年7月15日受理)